

トイレの男女問題―追記

大津 隆文

女性用トイレに入るといふ大失敗を犯したことから、今年二月「トイレの男女問題」なる駄文を記した。現行の男女別トイレには、男女間のスペースの最適配分が難しい、性的少数者（LGBT）への対応が難しいといった問題がある、その解決には、飛行機のトイレのように原則男女共用とすること、それが困難であれば「誰でもトイレ」タイプを増やすことはどうか、と愚考した。

この点に関する最新の体験報告。先日、新築の東急歌舞伎町タワー二階のフードコートにあるトイレを利用した。フロアのトイレ案内には二つのサインが出ている。一つは小便器の前で人が反つくり返っている、他の一つは便器に人が座っている。

もちろん前者の方へ進んだが、入ってみると小便器が並んでいるだけで大の個室はない。他方後者はどうなっているのか。こちらは同一スペース内に13の個室があり、女性用5、男性用2、ジェンダーレス5、バリアフリー1となっているようだ。

時代の流れに応える先駆的な設定と思うが、評判は芳しくないようだ。女性は洗面台でお化粧をしたりする際に、隣に男性がいては落ち着かないし、男性としても女性の多い空間には入りにくい。夜間の利用には飲食店からキーを借りる仕組みだが、昼間は出入り自由なので盗撮装置のセット等の性犯罪を心配する声もある。

だが色々な問題点へは対応可能だし、心理的抵抗感も薄まっていくのではなからうか。少なくともこうしたトイレで救われる人がいるのだから、何とか定着して欲しい。

トイレの次は浴場の問題がある。現在は公衆浴場や温泉大浴場はつきり男女に分かれている。温泉旅館には貸切浴室もあるが、性的少数者の大浴場利用の要望にはどう応えるか。個室ではないのでトイレ以上に難しそうだ。

先の国会でLGBT理解増進法が成立した。不十分、行き過ぎとの声もあるが、日本の社会が、少数者にも住みやすい社会、多様性を幅広く認める社会になっていくための、まずは第一歩と評価したい。